



矢島 渚男 選

あやまちほそもそもここに原爆忌

上尾市 松本 光弘

【評】田島・宮内庁長官の会談記録『拝謁記』に昭和天皇は張作霖爆殺で私が関東軍を厳罰に処してさえいれば、と事あるごとに後悔した。これが満州建国一五一一日米開戦の起点とされる。天皇の後半生は反省の連続だったという。

語り部は戦後の生まれ敗戦日

郡山市 寺田 秀雄

【評】戦後80年、状況の伝達から歴史の本質へ進みたいものだ。この日のNHKの特集番組は新世代の姿も伝えていて立派だった。

鉄ガラス時計の溶けし暑さかな

川崎市 多田 敬

【評】この句も語り部の一句か。伝聞はやはり、弱いようだ。

掛け水を浴びて御輿のまた荒るる

狭山市 清水 政美

人体の部位にこめかみかき永

栃木県 あらあひとし

夕顔の花を合はせて暮れにけり

小平市 本橋 英雄

暮れさうで暮れてしまへり夏の暮

加須市 福田 啓一

考へて考へて蟬生れけり

大阪市 小山 淑子

梯梧咲く摩文仁の丘や慰霊の日

神戸市 大浜 義弘

小休止五分のお花畑かな

大阪市 今井 文雄

高野ムツ才 選

老鷹はこゑのほか無きかと思ふ

大月市 米山 明博

【評】夏の鷹は「声はすれども姿は見えぬの名文句の代表格。山中で声の主を探そうとした覚えは誰にもあろう。諦めたその時あはれは声のみの存在なのだ」と一人納得したので。這い果てし蛇の骸やアスファルト

鳥取県 馬野慎一郎

【評】移動中にもまたまた舗装道路に出てしまった蛇。必死にものがき苦しんだ俳句の死。人間の非業の死を凝視しているかのようだ。

演説より熊鷹のこゑ傾聴す

小田原市 北見 鳩彦

【評】熊鷹の大音響の方が傾聴するに値するなんて、どんな演説だろう。選挙の句は難しいが、一茶に通ずるアイロニーがよく効いている。

原子炉に挑む尺蠖一糞

東京都 福島 隆史

帰省子と土産積みたる夜行バス

相模原市 はやし 央

青田風母の柩をつつみこむ

東京都 佐藤 勝美

虹消えてペロペロキャンディ手に残り

西東京市 永井 康信

桑の実を喰めば戦後の二部授業

長岡市 笹岡 勲

久慈琥珀有史以前の夕焼いろ

横浜市 我妻 幸男

鼻の辺に來し蠅死臭嗅ぎをるか

東京都 天地わたる

正木ゆう子 選

蟹の子に山雨激しくなりけり

浜松市 久野 茂樹

【評】山雨だから沢蟹だろうか。子蟹に危機が迫る場面だが、句がもたらすのは涼しさだ。場面の涼しさに加え、句の響きがいい。ナ行音の多い中に、中七のサ行音が涼しげ。ほろほろと散れば転がる百日紅

川崎市 久保田秀司

【評】木にある時は小花が集まって房状。その中で小花は咲いては散り咲いては散り。散ると、縮緬状の花はまるで金平糖か雛あられのよう。スタンドよりち切れ落ちたるバナナに斑

斑

門真市 皆木多恵子

【評】自らの重さに耐えかね、バナナスタンドから落ちる熱し過ぎのバナナ。皮は裂け、一部の皮でぶら下がる無残な姿。これが詠まれるとは。養生の五色餅やか胡瓜もみ

さぬき市 塚原 賢治

瓜もみにポリエチレンの袋かな

京都府 山田 国雄

しばらくは蜜柑の花の予讃線

吹田市 前田 尚夫

白百合やウィーン少年合唱団

横浜市 岡 まゆみ

雲間には虹の断片夕の風

会津若松市 安藤 和繁

わたくしを励まし生きて大暑かな

八王子市 小柳 清治

駄句なれど日記代はりや梅雨に入る

つくば市 横田 和己

小澤 實 選

キャンプファイヤー火の神役の低き声

流山市 高橋 郁代

【評】キャンプファイヤーの火の神役は、たいまつを持って近づき、着火のつとめを果たし、人間にとっての火の大切さを説くのか。ただ燃やすだけでないのいい。少年が少女に譲る清水かな

松江市 三方 元

【評】少年が清水で水を汲んでいると、少女が現れた。その彼女にまず清水を譲ったというのである。清水という場所が恋が始まるのか。夜の秋猫の尻尾が手に当たる

高岡市 池田 典恵

【評】夜の秋は晩夏の季語。夜になって、秋の気配が立つこと。こころぼそくなった猫が、飼い主に近づいて、尻尾が手に触れたのかも。ペディキュアを線香花火照らしたる

さいたま市 新原 健

太陽と男を連れてサングラス

神戸市 山口 誠

龍を見し眠れぬ夏の夜の空に

東京都 渡辺 貴子

汗の背にソファの革の吸ひつきぬ

横浜市 岡 一夏

青梅や徴兵制が始まる日

館林市 坂口 穰

三人に大瓶二本ビール酌む

枚方市 秋岡 実

声揃へ山賊の唄登山道

高知市 加田 紗智

俳句あれこれ

成田一子 (俳人)

追悼 辻桃子さん

俳人の辻桃子氏が先の六月十一日に亡くなられた。享年八十八歳。地方の小さな俳句結社を父から継いだ私を、いつも気にかけて下さっていた。訃報に接し、茫然としていたがその直後に氏から句集が届いたのにはつくづく驚いた。『白桃抄』文学の森。今では入手困難となった初期の作品を中心にまとめられている。八胴体にはめて浮輪を買ってくる。八麦秋やソースじやぶりとアジフライ。どの句もついついさっき詠まれたようなフレッシュな味わい。真っ白い表紙からは、いつもお洒落で凛としていた桃子氏の姿が偲ばれた。半面お茶目で、親子ほど歳の離れた私から見てもチャームキングな女性だった。こんなタイミングで句集が届いて、驚かれたでしょう」と悪戯っぽく微笑む桃子氏のお顔が浮かぶようだった。『俳句って、たのしい』を掲げた桃子氏、最期のときまで句集のサブライズというかたちで私たちに元気を下さった。合掌。



題字デザイン・イラスト 福田美蘭